

第43回広島2人デモ

2013年4月5日(金曜日) 18:00 ~ 19:00 毎週金曜日に歩いています

調査・文責: 哲野イサク
チラシ作成: 網野沙羅
連絡先: sarah@inaco.co.jp



広島2人デモはいてもたってもいられなくなった仕事仲間の2人が2012年6月23日からはじめたデモです。私たちは原発・被曝問題の解決に関し、どの既成政党の支持もしません。期待もアテもしません。マスコミ報道は全く信頼していません。何度も騙されました。また騙されるなら騙されるほうが悪い。私たちは市民ひとりひとりが自ら調べ学び、考えることが、時間がかかっても大切で、唯一の道だと考えています。なぜなら権利も責任も、実行させる力も、変えていく力も、私たち市民ひとりひとりにあるからです。

詳しくはチラシ内容をご覧ください

私たちが調べた内容をチラシにしています。使用している資料は全て公開資料です。ほとんどがインターネット検索で入手できます。私たちも素人です。ご参考にしていただき、ご自身で第一次資料に当たって考える材料にしてください。

関電

危険で違法な

黙っていたら“YES”と同じ

大飯原発再稼働を止めましょう

『放射能安全神話』の大宣伝

小さな、か細い命を奪ってはなりません

本日のトピック

放射線被曝に安全量はない 世界中の科学者によって一致承認されています。

- 極低線量 (1mSv 以下) でも内部被曝は死に至る危険
- 核推進自民党安倍政権誕生で強気に転じる電力業界・核産業界 - 日本原燃に見る居丈高
- 原発再稼働のための『安全基準』から『規制基準』へ



極低線量 (1mSv 以下) でも内部被曝は死に至る危険

毎日いろんなことが起きます。「原発問題」や「放射能問題」は今や遠い過去の話になりつつある、というのは一体どこの国の話でしょうか？ マスコミが大仰に報じなくても、よくよく注意してみれば、子どもたちに、そして放射線弱者である高齢者に、東電福島第一原発事故から放出された放射能による危険がひたひたと私たちに迫っていることがわかります。たとえば、心臓内科医で福島市や郡山市などで実施されている『子ども健康相談会』に定期的に参加している斧澤克乃(おのざわかつ)さん(東京都内クリニックに勤務)は、福島現地の様子を次のように報告しています。

「将来的にどのような影響があるかわからないと思い、母親たちは必死に情報収集し、体制を整えてほしいと訴えているのに、『安全だから、検査は必要ない、県外避難も勧めない』というだけ。しかし、子どもたちは実際に、のどの痛み、鼻血、下痢、倦怠感、頭痛、発疹など様々な症状を呈しているのです。」(2013年4月4日朝日新聞朝刊「耕論」欄 - 大阪本社版 山口栄二記者)

ここで斧澤さんが指摘している症状は、子どもたちの体の中で何か異変が起こり、その異変が危険信号として体の外に表出している症状ばかりです。私はそれを電離放射線による細胞損傷が根本的な理由だ、と断言して憚りません。みなさんの身の回りにもこれと似た症状の子どもたちがいませんか？ もしいたら、放射能の危機が福島だけでなく広く静かに広がり始めている徴候です。(中国の鳥インフルエンザや風疹大流行、PM2.5 などと騒いでいる場合ではありません。私は最近のマスコミの報道ぶりを見ると、「フクシマ」から目を逸らせるのが狙いでは？と勘ぐってしまいます)

でもこの話、どこか辻褃が合わないと思いませんか？ というのは、政府、厚生労働省や環境省、マスコミや放射線医学のそうそうたる“権威”たち、あるいは県や市の保健・衛生担当者は、みんな口を揃えて、「100mSv以下の被曝は健康に影響はない」あるいは「健康に影響があるという科学的証拠はない」と言います。さらに進んで「100mSv以下の低線量被曝は安全だ」と断言する行政担当者や学者・研究者もいます。

そうすると、これらの症状は「放射線を心配し過ぎ」で現れた症状なのでしょうか？ 私たちは誇大妄想なのでしょうか？

いやそんなことはありません。子どもを心配する母親の直観は正しいのです。下の表を見て下さい。この表は1986年のチェルノブイリ事故で深刻な放射線被害にあっているベラルーシの、ユーリ・バンダジェフスキーという病理学者が、事故後1年以上経過して受精し、それから生まれた乳児のうち6か月以内に死亡した6体を病理解剖し、体の臓器などに蓄積した「セシウム137」の蓄積量を計測した表です。膨大な蓄積と見えますが、**「3. 敗血症・出血」で死亡した乳児は、合計7578 Bq (ベクレル)の蓄積量でした。また「2. 未熟・奇形」で死亡した乳児の蓄積量でも4万2576 Bq、また「5. 心臓病」で死亡した乳児は1万9562 Bqの蓄積でしかありません。「蓄積でしかありません」というのにはわけがあります。**

<裏面につづく>

生後6か月未満で死亡した乳児の死因と各臓器セシウム137集積レベル

※数値は全てベクレル

死亡乳児死因	集積臓器					
	1 敗血症	2 未熟・奇形	3 敗血症・出血	4 大脳奇形	5 心臓病	6 敗血症
心臓	5,333	4,250	625	4,166	1,071	1,491
肝臓	250	277	525	851	882	1,000
肺臓	1,125	2,666	400	1,195	1,500	2,610
腎臓	1,500	1,687	259	2,250	812	583
脳	3,000	1,363	305	90	1,693	714
甲状腺	4,333	6,250	250	1,900	検出せず	1,583
胸腺	3,000	3,833	1,142	3,833	714	833
小腸	2,500	1,375	571	3,529	2,200	590
大腸	3,250	3,125	261	3,040	4,000	2,125
胃	3,750	1,250	1,500	検出せず	検出せず	検出せず
脾臓	3,500	1,500	428	1,036	2,000	2,125
副腎	1,750	2,500	検出せず	2,500	4,750	2,619
膀胱	11,000	12,500	1,312	検出せず	検出せず	2,941

【資料参照】「子どもたちの臓器におけるセシウム137の慢性的蓄積」
ユーリ・バンダジェフスキー (2003年スイス・メディカル・ウィークリー掲載論文)
www.inaco.co.jp/isaac/shiryo/hiroshima_nagasaki_fukushima/08.html
英語原文 http://www.smw.ch/docs/pdf200x/2003/35/smw-10226.pdf

極低線量（1mSv以下）でも内部被曝は死に至る危険

100mSv以下の被曝は安全？

「100mSv以下の被曝は安全だ」といういい方と比べて見ましょう。ここで「100mSv」と言っているのは、**実効線量（単位名称はSv=シーベルト）**のことです。実効線量は、一般に「電離放射線が人体に及ぼす影響の大きさを表す概念」または「その単位」と説明されています。（実際に、内部被曝では全くこの実効線量があてにならないことは後でみます）一方、Bq（ベクレル）とは放射能の濃度あるいは量を示す単位です。**量が多ければ多いほど「放射能の強さ」は大きくなるかという必ずしもそうではありません。**今度は個々別々の放射線核種（たとえば、ヨウ素131、ストロンチウム90、セシウム134、セシウム137などの核種）によっても違います。というのは**核種によって細胞を損傷するエネルギー（電離エネルギー）の大きさが違う**からです。ですから、人体への影響ということになると、**濃度（量）とどの放射性物質なのか（核種）の両方を考えて判断**しなければなりません。

話はややこしくなってきましたが、ヒトの命に関わる大事なことで、もうすこし辛抱して読んでみてください。

さてこうして核種を特定し、その核種の放射線量（Bq）が決まれば、さらにそれをどのようにして体内に摂取したか（**呼吸で取り入れたかあるいは経口摂取したか、あるいは傷口から入ったか**）がわかれば、放射線を人体に与える影響（つまりシーベルト）に換算することが可能となります。実際そのための換算表もあります。今、文科省告知で定めた換算係数を使って、ベラルーシで死亡した乳児の体の中のセシウム137の蓄積量を実効線量（シーベルト）に換算してみましょう。

「3. 敗血症・出血」で死亡した乳児のセシウム137の蓄積量は、7578Bqでした。実効線量（シーベルト）は必ず体重1kg（物質1kg）あたりについての概念ですから、今仮にこの乳児の体重を3000g（3kg）と見てみましょう。つまりこの乳児は体重1kgあたり平均約2600Bqの蓄積をしていることとなります。すべて経口摂取した場合の**セシウム137の換算係数は、「1Bq = 0.013μSv」**ですから（左下の換算計算表を参照のこと）、**体重1kgあたり2600Bqは33.8μSv（マイクロシーベルト。1シーベルトの100万分の1）**で死亡していることとなります。同様に**「5. 心臓病」で死んだ乳児の蓄積量は1万9562Bq**でした。これも体重3kgとみれば、1kgあたり約6500Bqとなり**実効線量は84.5μSv**となります。さらに**「1. 未熟・奇形」で死亡した乳児の蓄積量は、1kgあたり1万4200Bq**ですから**実効線量は184μSv**となります。

100mSv（0.1Sv）の100分の1の1mSv、そのまた1000分の33.8、84.5、184mSv（1mSv=1000μSv）というわずかな実効線量でも乳児は様々な原因で死に至っています。特に1mSv以下の被曝線量を『極低線量』と呼んでいますが、セシウム137など寿命が長くしかも毒性の強い（**安定するまでの放出電離エネルギーが大きい**）核種を体の中に取り込み（**内部被曝**）、しかも慢性被曝状況になった時は、極低線量内部被曝でも死にいたる危険があることがわかりました。

セシウム137 経口摂取時 1ベクレルのシーベルト換算計算

$$1\text{Bq} = 1.3 \times 10^{-5} \text{mSv}$$

$$1\text{Bq} = 1.3 \times 0.01 \mu\text{Sv}$$

$$1\text{Bq} = 0.013 \mu\text{Sv}$$

【資料出典】 文科科学省「放射線を放出する同位元素の数量等を定める件 最終改正 2012年（平成24年）3月28日 文科科学省告示第五十九号」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/anzenkakuho/micro_detail/_jicsFiles/afieldfile/2012/04/02/1261331_15_1.pdf



【資料出典】 大分県発行パンフレット「放射線ってなんだろう」
<http://www.pref.oita.jp/soshiki/13900/housyasen.html>

体重1kgあたり770万Bqのセシウム137の蓄積

そうすると、「100mSv以下は安全」という話はどこにいったのでしょうか？ 実際そうした宣伝は今日本中にあふれかえっています。たとえば、大分県生活環境部が2012年8月に発行した『放射線ってなんだろう』というパンフレット（第2版）には、次のような記述があります。話題は放射線の『胎児への影響』です。

（下記画像参照のこと）

「（放射線で胎児の）器官形成期において最も影響を受けることがわかっていて、主な影響は奇形や発育遅延などです。また、胎児影響にはしきい値があり、約100ミリシーベルト以下では生じません。」

バンダジェフスキーの研究では、**6か月未満の乳児が1mSv以下のセシウム137の極低線量内部被曝で死亡しているのに、このパンフレットでは、乳児よりさらに放射線感受性の高い胎児が100mSvの被曝をしても全く健康に影響がない、と**いっているのです。こうなるとバンダジェフスキーの研究がでたらめか（**つまりそれを引用している私がでたらめか**）、大分県民の健康に最高責任をもつ大分県行政当局がでたらめなのか、2つに1つ、その中間はない、ということになりそうです。片方は大分県の行政当局、片方は広島の名もなき一介の市井人（**つまり私のことですが**）、権威から見ると勝負になりませんが、どちらがでたらめなのかは皆さんがご自分で判断する他はありません。

ちなみにここでいう100mSvをすべてセシウム137だとして、すべて経口摂取したとすると、先ほどの換算係数を使えば、このパンフレットに登場する**妊婦さんは、体重1kgあたり約770万Bqのセシウム137を蓄積**していることとなります。これはどの基準に照らしても**高濃度放射性廃棄物のレベル**です。またお腹の中の胎児を含めこの妊婦さんの体重を50kgだとすると、全身に3億8500万Bqのセシウム137を抱えていることとなります。つまりこの**パンフレットは全身に3億8500万Bqのセシウム137を蓄積していても「母子ともに健康」と主張**していることとなります。

（私は思うのですが、この若い母親も、もちろん胎児も生きていることはできません、この濃度では）

放射線の生体への作用と健康影響

20

胎児への影響

●約100ミリシーベルト以下（しきい値）の線量では生じない

母親の妊娠中に、胎児が放射線を受けて生じる影響を胎児影響といいます。胎児影響は妊娠時期により異なります。妊娠のステージは着床前期（0～9日）、着床期（9～14日）、器官形成期（15～50日）、胎児期（50～280日）に分けられます。この中で器官形成期において最も影響を受けることがわかっていて、主な影響は奇形や発育遅延などです。また、胎児影響にはしきい値があり、約100ミリシーベルト以下では生じません。

20

核推進勢力が恐れる『浪江病』の蔓延

さて大分県のパンフレットはなぜ、このようなすぐ見透かされるデタラメを書いたのでしょうか？一つには多くの大分県民に「低線量での放射線被曝は安全なのだ、健康に害がないのだ、無闇やたらと放射能を恐がるのはやめよう、放射能を正しく恐がろう、放射能は一時に大量に浴びない限り安全なのだ」という言説（私はこの種の言説を『放射能安全神話』と呼ぶことにしています）をどうしても刷り込みたかった、という事情があります。というのは「放射能は極低線量でも場合によれば、健康影響があるどころか、命が危険」という真実が私たち有象無象の大衆に広まってしまっただけで、原発など核施設を受け入れる自治体などは全国どこにもなくなってしまっただけです。つい先日も福島原発事故の地元、福島県浪江町が強硬に反対し、同地に東北電力が長い間計画であった「小高原発電建設」を断念する、というニュースがありました。『放射能安全神話』を振りまく人々が最も恐れることは全国に、そして全世界に『浪江病』が蔓延することなのです。『浪江病』がこれ以上広がっては、いま原発を喜んで受け入れている福井県の人たちも（全員ではありません）、祝島の人々をのぞいて中国電力上関原発を早く着工させようと急いでいる山口県上関町の人たちもどう転ぶかわかりません。ましてや『浪江病』が国民に感染しては、原発推進勢力にとっては万事休すです。私たちが「生存権」を護ろうと必死である以上に彼らも必死です。今は原発推進安倍自民党政権が誕生して、強烈な追い風が吹いている原発推進派ですが、この追い風があてにならないことを一番よく知っているのも彼らです。

「1回切り外部被曝」を想定

しかし、このパンフレットがデタラメを書いたのにはもう一つ大きな理由があります。それは、このパンフレットが想定している被曝のタイプが、「1回切りの外部被曝」だということです。つまりこのパンフレットは、セシウム137など毒性の強い放射線核種の内部被曝などという被曝のタイプは全く想定していなかったのです。「1回切り外部被曝」とは広島・長崎における原爆被曝を研究したABCC＝放射線影響研究所の原爆被曝生存者研究（LSS）を念頭においてこの記述を行っているのです。（実際には、広島・長崎の原爆被曝で“外部1回切り”の被曝などはありませんでした。数回外部被曝もありましたし、放射性降下物（代表的には黒い雨）による内部被曝も数多く発生していたことは地元の私たちが一番よく知っています。ただ、LSSは外部から1回切りの被曝という仮説を前提にまとめた研究、放射線被曝研究としては極めていびつな研究だ、ということです）

「外部1回切りの被曝」を前提にした「LSS研究」を念頭に置いた記述だから、「100mSvまでは安全」と言い切ってしまったのです。

ベクレルとシーベルトの「トリック」

【ベクレル (Bq)】

ベクレルとは放射能の量（濃度）を表す単位です。“Bq”と表示します。放射能の量とは、放射性物質1gが1秒間に何回核崩壊するかで決まります。1秒間に1回核崩壊すると1Bqとカウントします。たとえば代表的な放射性物質、ラジウムは1秒間に 3.7×10^{10} 回核崩壊します。ですからラジウム1gの放射能濃度は370億Bqということになります。注意しなければならないのは、放射能の濃度（量）は、その放射性物質の放射能の強さを必ずしも表してはいない、ということです。というのは放射性物質は核種によって崩壊時放出するエネルギーの大きさが違うからです。よく「ベクレル値」だけを比較して「人間の体の中には4000Bq（体重によって違います）のカリウム40がある。だから4000Bqの放射能などは何でもないので」といった類のトリック問題が出てきますが、カリウム40は体の中で放出するエネルギーが弱く内部被曝で健康損傷などしません。要するに「核種」と「その濃度」（ベクレル値）で内部被曝の危険を判断することが重要です。

【シーベルト (Sv)】

シーベルト（表示記号はSv）はややこしい概念です。ここでは実効線量のシーベルトについて説明します。実効線量概念とその体系の産みの親ICRPの説明に従って「シーベルトは放射性物質からヒトが受ける影響の大きさを表す単位」ということとなります。しかし一様な被曝を受ける外部被曝ではこの説明はほぼ妥当ですが、内部被曝では全く当てはまりません。右のイラストをご覧ください。

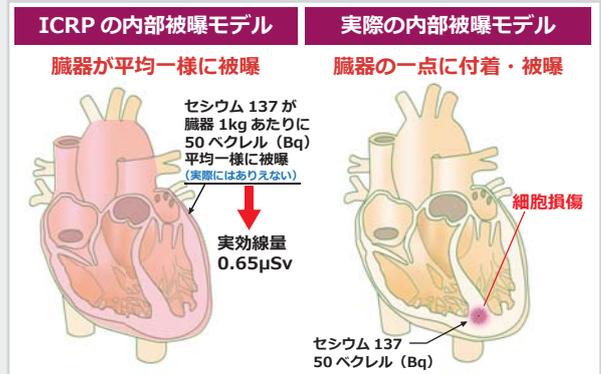
放射能安全神話を支える『シーベルトのトリック』

しかしどちらにしても、同じことです。現在日本政府や代表的な権威ある放射線医学者たちは、これも「LSS研究」での仮説、『内部被曝も外部被曝も同じリスク。外部の1mSvは内部の1mSvで同等のリスク』と言っているのですから。このパンフレットでいっている被曝線量100mSvは内部も外部も同じリスクの筈です。もし内部も外部も同じリスク、というなら全てセシウム137の内部被曝だったとして、私が計算してもリスクは同じとなるはずですが。しかし実際計算してみると、100mSvはとんでもないセシウム137の蓄積となり、誰が見てもこの「母子」は生存を許されないセシウム137の蓄積量となります。

このことは何を意味するのでしょうか？そうです。内部被曝と外部被曝のリスクは同じではない、ことを意味しています。特にセシウム137やストロンチウム90など、体の中で2回も核崩壊し、そのつど電離密度の高い放射線を放出し、細胞を傷つけていく放射線核種はとくに危険ということになります。電離密度の低いしかも体の中で1回しか核崩壊しない放射性物質、たとえばカリウム40などは何千ベクレル取り込んだとしても影響は全くありませんが、セシウム137やストロンチウム90、体の中で「アルファ線」という膨大な電離エネルギーを放出するたとえばプルトニウムなどは、たとえ十数ベクレルでも危険、ということになります。

従って、これまで見たように「実効線量」（シーベルト）では、内部被曝の危険を推定することすらできません。パンダジェフスキーの研究で見たように、1mSv以下の極低線量被曝でも、乳児はそのたった一つしかない小さな命を失っているのですから。放射線被曝の危険を、特に内部被曝時に、実効線量（シーベルト）の概念で推し量ることは全く不可能です。

冒頭で実効線量（シーベルト）を私は「電離放射線が人体に及ぼす影響の大きさを表す概念」と書きましたが、これは放射線防護の国際的権威とされる国際放射線防護委員会（ICRP）の定義、説明に従ったまでのことです。ここでこの定義を訂正しなければなりません。「実効線量（シーベルト）とは、危険な核種の内部被曝損傷を、極端に過小に見せかけ、低線量放射線内部被曝が人体にとって危険でないかのように見せかける単位概念とその体系」と訂正します。実際『放射能安全神話』を支えているのはこの『シーベルトのトリック』なのです。



心臓の心筋にセシウム137が50Bq付着したとしましょう。（右側イラスト参照）これが実際に起こる内部被曝です。50Bqのセシウム137は確実に心筋の細胞を損傷させます。しかも核崩壊のたびに高いエネルギーを出し続け心筋自体を機能不全に導く可能性があります。しかし、実効線量換算ではわずか0.65μSvに過ぎません。それは実効線量に「体重1kg」あたりという平均化概念が隠れているからです。つまり1点に付着した50Bqのセシウム137は左側のイラストのように心臓全体に1kgあたり50Bqと平均に散らされてしまうのです。こんな内部被曝は実際にありえません。つまり、実効線量＝シーベルトは、内部被曝に当てはめると、内部被曝損傷を極端に過小評価して表現することのできる“隠れ蓑”なのです。内部被曝損傷をシーベルトで判断することは絶対に誤りです。

核推進自民党安倍政権誕生で強気に転じる電力業界・核産業界 －日本原燃に見る居丈高

この発端は、日本原燃（本社：青森県上北郡六ヶ所村）が進める使用済み核燃料再処理工場に関して、この3月末頃の規制委員会で、日本原燃に「2013年10月に工場が完成しても、再処理工場のための“規制基準”ができていない段階では稼働を認めない」と決定しそれを通知したことでした。

現在規制委が準備を進めている“規制基準”はあくまで「発電用軽水炉施設」の規制基準で、言いかえると商業用原発の規制基準で、日本原燃の進めている使用済み核燃料再処理工場は全く該当しません。それも道理で、再処理事業は技術的にも、リスクの上でも、発電用原子炉などとは比較にならない困難な事業です。これに別途の規制基準を設け、この規制基準で審査するという主張は当然でしょう。しかし「再処理工場用規制基準」作りはこの4月半ば過ぎから作業を開始し、できあがって施行されるのは12月末がギリギリというスケジュールです。ですから基準ができる12月まで、原燃の再処理工場の審査もしないし（できないし）ましてや稼働も認めない、と決定し通知したわけです。しかし、これに猛然と噛みついたのが日本原燃です。2013年4月3日付け同社・社長川井吉彦氏名で公表されたプレスリリースから引用します。

「・・・今後は、安全に直接関係する機能の確認ではなく設備の処理能力に関する性能検査を残すのみとなっている。このため、是非、肅々と受検させていただきたい。いずれにしても、当社としては、新規規制基準が公布・施行されれば適切に対応してまいり。4月15日から検討が開始される新規規制基準については、できるだけ早くお示しいただきたい。公布前でも事業者として対応できるものは対応したい。なお、新規規制基準の策定にあたっては、再処理施設の特徴を踏まえていただくとともに、事業者の意見をしっかりと聞いていただきたい。」

ポイントは、安全検査は必要ない、性能検査だけだ、新基準については早く示せ、なお新基準策定にあたっては再処理工場の特殊性を踏まえろ（要するにハードルをあげずに手加減しろ）、事業者の意見をしっかりと聞け（解説の用なし）というところにあります。特徴としては、まるで目下に対する要求やものいいにあります。『居丈高』という表現がぴったりでしょう。日本原燃がここまで『居丈高』になった背景はもちろん安倍政権誕生にあります。民主党政権時代はどちらかといえば否定的に「核燃料サイクル事業は継続を見直す」としていたのが安倍政権になって「核燃料サイクル事業継続」の方針を打ち出したため、原燃は一挙に息を吹き返し、急に居丈高になったものと見えます。

「再処理事業」とは何でしょう。日本各地の原発から使用済み核燃料を集めてそこからプルトニウム239やウラン235を抽出し、もう一度燃料として使おうという事業です。ところがこの事業は、右表『日本原燃のあらまし』の『事業内容』を見ておわかりのように、過去トラブル続きで18回も完成延期してきたシロモノです。そしてやっと2013年完成稼働にこぎつけたところで、今度は“新規規制基準”ができ上がるまで稼働認可はおろか審査すらしない、というわけですからその苛立ちは前述のプレスリリースにそのまま現れています。しかも日本原燃は、その財務内容から見て、普通の企業であればとつとつ倒産という内容です。借入金と株主の電力会社からの「再処理料金前渡し金」でやっと倒産を免れているという“超優良企業”です。しかも原発以上に危険なシロモノ。一刻も早く会社をたたんで撤退する、というのが一番賢い選択でしょう。

原発再稼働のための『安全基準』から『規制基準』へ

原子力規制委員会は4月3日の定例委員会（平成25年度第1回会合）で、これまで原発再稼働のための『新安全基準』と呼んできた一連の規制措置を、今後『規制基準』と呼ぶことを決めました。「ふん、単なる呼び名の変更か！」というなかれ。名は体を表すといいますが、呼び名の変更は重要です。朝日新聞4月4日付朝刊（大阪本社版）によると規制委の田中俊一委員長は「安全基準だと、基準さえ満たせば安全だという誤解を呼ぶ」と発言し、名称変更の意図を説明したそうです。（4月4日18:00の時点で規制委3日会合の議事録が規制委Webサイトに掲載されていないので、朝日新聞の記事に拠ります）呼称変更の開始は7月の『規制基準』施行後からとなっていますが、3日会合後の定例記者会見議事録を読むと、すでに規制委員会は『規制基準』と呼んでおり、私たちもこの呼び名は妥当だと考え、7月をまたず、今後原発再稼働のための『規制基準』と呼ぶことにします。経団連（米倉昌弘会長＝住友化学会長）や経済同友会（長谷川閑史代表幹事＝武田

薬品工業社長）などを代表とする経済界、大手銀行をはじめとする金融界、もちろん電力業界や三菱重工、日立、東芝をはじめとする日本の核産業界は、現在自らの利益のために、原発再稼働の圧力をかけ、これまた原発など核施設の推進政策をとる安倍自民政権共々、再稼働のための「規制基準」をできるだけゆるめようと圧力をかけています。これら日本の核推進勢力は、安倍自民政権誕生で勢いづいていますが、私たちは少々お灸をすえてやらねばなりません。さしあたり経団連会長の出身企業グループ“住友”の名前がついた製品・サービスは買わない、利用しないことにしましょう。また経済同友会代表幹事の出身企業である武田薬品の製品は買わないようにしましょう。特に“アリナミン”は絶対にいけません。核推進勢力が元気になります。もちろん“三菱”、“日立”、“東芝”などと名前がついたものは絶対にいけません。私たち一般市民は、一般市民らしい対抗手段をとりましょう。よろしくお願いします。

日本原燃株式会社のあらまし

本社：青森県上北郡六ヶ所村
設立：1992年7月1日
資本金：4000億円（青森県最大企業）
売上：3017億円（2012年3月末）
純資産：5611億円（2012年3月末）
総資産：2兆8312億円（2012年3月末） （再処理料金前受金 6539億円） （長期借入金 8023億円）
会長：八木誠（現関電社長）
社長：川井吉彦（元東電取締役理事）

事業内容

ウラン濃縮	青森県上北郡六ヶ所村工場 生産量：150トンSWU/年規模
廃棄物埋設	ウラン濃縮工場に隣接 低レベル放射性廃棄物の埋設処分
廃棄物管理	青森県六ヶ所村施設。高レベル放射性廃棄物の硝子固化と管理貯蔵
核燃料再処理	六ヶ所再処理工場。使用済み核燃料からプルトニウム239と燃料ウランを取り出す作業。2010年の本格稼働を予定していたがトラブル相次ぎこれまで18回の完成延期。建設費は7600億円の予定だったが、2011年2月現在約2兆2000億円費やしている。
MOX燃料製造	再処理工場隣接。2010年10月着工2016年3月竣工予定。総工費は1900億円

主要株主（非上場会社）

東京電力	28.60%	日本原子力発電	5.06%
関西電力	16.66%	四国電力	4.28%
中部電力	10.04%	北海道電力	3.67%
九州電力	8.83%	北陸電力	2.96%
東北電力	5.78%	その他	8.81%
中国電力	5.31%		

その他の構成は不明だが、役員構成などから見て、金融機関や日立、三菱重工、東芝など核産業界の資本出資も確実。

【資料出典】日本原燃 公式Webサイト
日本原燃 第33期（2012年3月末）会社概況書
日本語ウィキペディア 『日本原燃』

三菱鉛筆株式会社は“三菱”の名前がついていても旧三菱財閥企業グループとは何の関係もない、独立・健全な良質企業です。お間違えのないように。スリーダイヤモンドマークは三菱グループよりも三菱鉛筆が日本で最初に使いました。